

「嘉納治五郎とナショナリズム」

○構成

序論

- 第一節 問題の所在
- 第二節 嘉納の講道館柔道とナショナリズム
- 第三節 従来の研究と本研究の目的
 - 1 ナショナリズム研究
 - 2 スポーツナショナリズム研究
 - 3 嘉納治五郎研究
 - 4 研究の目的
- 第四節 本論の構成

第一章 1860～1897 柔術から「創造された伝統」柔道へ

- 第一節 幕末から明治へ
 - 1 文明開化と天皇
 - 2 ネーションの創出
 - 3 明治時代のナショナリズム言説
- 第二節 講道館柔道の創始
 - 1 嘉納の受けた教育
 - 2 柔術から柔道へ 一伝統の創造
 - 3 「科学的」な柔道
- 第三節 教育者となった嘉納治五郎
 - 1 学習院時代と教育勅語
 - 2 熊本、高師の嘉納

小活

第二章 1898～1921 嘉納ナショナリズムの転換

- 第一節 明治後期から大正期におけるナショナリズム
 - 1 二つの戦争から「一等国」へ
 - 2 大正デモクラシーと「天皇なき国民」
- 第二節 『國土』
 - 1 『國土』1 一嘉納治五郎とネーション
 - 2 『國土』2 一嘉納治五郎と愛国心
 - 3 『國土』3 一嘉納ナショナリズムと福澤ナショナリズム
- 第三節 『青年修養訓』、『中学修身書』、『柔道』
 - 1 『青年修養訓』と戦争
 - 2 『中学修身書』と道徳
 - 3 『柔道』と愛国
- 第四節 明治後期から大正前期までの嘉納
 - 1 柔道の国際化
 - 2 臨時教育会議と国体

小活

第三章 1922～1938 精力善用、自他共栄とナショナリズム

- 第一節 超国家主義へ
 - 1 超国家主義の萌芽とテロリズム 一国民の天皇
 - 2 戦争の時代
- 第二節 精力善用・自他共栄の思想
 - 1 精力善用・自他共栄
 - 2 自他共栄とナショナリズム
 - 3 教育勅語と嘉納治五郎
- 第三節 大正中期以降の嘉納の著作
 - 1 『有効乃活動』、『大勢』 一柔道主義
 - 2 『柔道』 一震災からの精神的復興
 - 3 『作興』、『柔道』 一戦争と講道館
- 第四節 国際的な嘉納と権力装置としての柔道

- 1 嘉納と幻の東京オリンピック
- 2 国際柔道連盟という理想
- 3 権力装置としての大日本武徳会と講道館

小活

結論

○嘉納治五郎（1860～1938）

講道館柔道創始者。学習院教頭、東京高等師範学校校長を務め、灘中学校の創設に関わった教育者。東洋初のオリンピック委員となり、東京五輪（1940年）招致にも尽力。貴族院議員。弟子に廣瀬武夫、五島慶太、廣田弘毅など。

○研究の目的

従来の嘉納研究：ナショナリズムについての議論があまり行われていない。柔道家の創始者肯定的なものも多く、批判されることが少ない。

→その評価が妥当であるかを検討。時代ごとの嘉納のナショナリズムを一次資料に基づいて検証。

○先行研究

井上俊による研究で、柔道の「創造された伝統」としての性質、国民総動員のイデオロギー装置としての側面が指摘されている。後者については坂上康博がより具体的な研究を行っている。

その他、精力善用・自他共栄と教育勅語の関係なども一部の論文で部分的に指摘されている。

→一次資料の分析を主とした時代ごとのナショナリズムについての研究はされていない。

○柔術から柔道へ

- ・柔術（武術）

感覚で掴むもの。一子相伝体質。

- ・柔道（武道）

技術が体系化され、説明可能。大衆性。段位制度。

→井上俊が「創造された伝統」（ホブズボウム）だと指摘。

○近代国家とナショナリズム

- ・近代の国民国家（ネーション）とナショナリズム

ナショナリズムは近代に誕生（アンダーソン、ゲルナー、ホブズボウムらの近代主義）（⇔スミス、ギアーツなどの反近代主義）

- ・「大きな物語」

近代＝大きな物語の機能する時代（リオタール）。

○前期嘉納ナショナリズム（～2章前半）

幕末～日露戦争ごろ

【日本】

国民国家が徐々に形成（廃藩置県、神道国教化政策、教育制度確立、教育勅語、帝国憲法）

→日本の「近代化」、資本主義の形成、ナショナリズムの誕生

「一等国へ」という大きな物語。

【嘉納】

・二分法で見る嘉納のナショナリズム

シヴィック、エスニック二分法

- シヴィックナショナリズム：国家に生きる市民が持つ
- エスニックナショナリズム：国家の伝統を共有する人が持つ

※ただし、大抵のナショナリズムはこの分類の両者の性質を持つ。前者のみのナショナリズムは歴史上ないため、この分類は古いとも言えるが、本研究では嘉納のナショナリズムの性質をより鮮明に描くために用いる。

- 西欧列強の中での生き残りのための国力の増大の必要性（領土的＝シヴィック）
- 万世一系の皇室と日本文化への愛着（文化的＝エスニック）

→当時の日本で普通のナショナリズム

（幕末以来の対外的な恐怖意識＋明治期に創造された天皇集権的な共同体意識）

・嘉納ナショナリズムと福澤ナショナリズム

福澤諭吉のナショナリズム：バランスの取れたナショナリズム（丸山眞男）（↔超国家主義）

嘉納	福澤
<ul style="list-style-type: none">・ 国土の育成・ 日本精神の必要性・ 清国を保全すべき・ 排他的ナショナリズムでない・ 道徳の軸となる皇室（万世一系）	<ul style="list-style-type: none">・ 富国強兵のための人物育成・ 武士道は報国のためになる・ 中韓と争うべきでない・ 排他的ナショナリズムでない・ 秩序のための皇室（皇統連綿）

嘉納は「先づ一身の独立を図れ」など、福澤を彷彿させることも主張している。

嘉納が福澤の影響を受けたことを証明する資料はないが、嘉納は当時のナショナリズム言説に影響を受けており、彼のナショナリズムは超国家主義とかけ離れた福澤のそれにも近しかった。

○後期嘉納ナショナリズム（2章後半～）

日露戦争～日中戦争

【日本】

明治時代末期：「一等国へ」という大きな物語の一応の完結（日露戦争の勝利）。

大正時代：大正デモクラシー、思想の多様化（社会主義運動など）、「天皇なき国民」（大澤真幸）、天皇機関説などの登場、日本軍国主義との闘争。

大正後期から昭和初期：テロルと昭和維新、超国家主義の台頭。

【嘉納】

・日露戦争～大正前期

日露戦争の結果を賞賛（戦争の肯定）。

青少年向けの皇室崇拝的な道德書の作成（『青年修養訓』、『中学修身書』）。

皇国日本の特別視。

世界一の国を目標とする（「一等国へ」思想の残留）。

国家のための柔道の利用を主張（『柔道』）。

・「上中下段の柔道」

雑誌『柔道』で柔道の国家、社会への影響を説く。

- 下段の柔道：攻撃、防御
- 中段の柔道：精神修養
- 上段の柔道：国家、社会へ役立てる

・大正後期～日中戦争

大正デモクラシー下の思想の多様化を「思想の混乱」と捉える。

→国民の思想、道德の統一の必要性を唱える。

→皇室崇拝、国体擁護を主張、教育勅語の復権を目指す。

例) 関東大震災：「天が試練で日本人の惰眠と驕慢を破ろうとしているのではないか」
軍事教育を肯定。

満州事変で国家に同調的。

日中戦争で、戦争への講道館の貢献を主張。

政治性の強いオリンピックの招致。

思想善導のための武道の利用に賛同的。

○精力善用、自他共栄とナショナリズム

「精力善用」：自分の持つ力を最善活用する。

「自他共栄」：自分と他者の利益を考える。

「自他共栄」は「精力善用」の向かう方向を示す指針。

・「自他共栄」とナショナリズム

「自他共栄」は国家にも応用可能。

→自国だけでなく他国も発展させる＝インターナショナリズム？

→嘉納は日本を「優勝の位置」にするために「自他共栄」が必要だとする。

→そのまま各国が成長すれば相対的な力関係はあまり変わらない。

→日本を発展させる手段としての「自他共栄」。

(自国本位的な行動が必ずしも自国の発展に繋がるわけではないという発想)

・「精力善用」、「自他共栄」と教育勅語

教育勅語は根拠に乏しく、信憑性が薄まっている。

→根拠として、世界共通の真理である「精力善用」、「自他共栄」を設定。

(嘉納思想の権威付けの意図もあるか)

○嘉納治五郎と講道館柔道

柔術から柔道を創始＝「創造された伝統」(ホブズボウム)。

柔術には中国発祥説もあったが、それを批判し、日本の伝統文化であるとする(小泉八雲が嘉納の主張を批判)。

・柔道の国際化

「離陸期」(ロストウ)：一国の経済が農業中心の全近代的経済段階から、工業中心の近代的経済段階へ移る(中央集権的国民国家が必要)。

スポーツの海外普及(文化帝国主義)に中央集権的国民国家の発展(資本主義の成熟)が前提となる(グッドマン)。

↓↓↓

「国民国家—資本主義—近代化—スポーツの近代化—スポーツの文化帝国主義」

19世紀末ごろに始まり、20世紀初期に柔道が海外に広まる。

「日本が柔道を世界に教えることで、日本が世界文化に初めて寄与できる。それによって、日本の世界的発展も助長される。」

「世界に柔道を授け、日本を精神的な債権者にする。」

→日本を国際的優位にするための柔道。

⇒国際柔道連盟の設立を目指す(嘉納の生涯では失敗)。

○結論

嘉納は昭和初期の超国家主義的な言説の形成や、武道による思想善導に積極的に関わろうとしていたと言える。彼の政界、軍部、実業界の人脈の広さや講道館の入門者の多さを考えれば、嘉納が昭和初期の世論形成に与えた影響は少なくないだろう。

